

## シノドスに向けた質問への回答まとめ

カトリック奈良教会

奈良教会ではコロナによるミサ中止期間もあり、ミサが再開されても感染予防対策により、集まって分かち合いの場を設けることが難しいため、アンケート形式で広く皆さんの声をお聞きすることとしました。

概要は以下の通りです。

●実施期間：2022年3月13日～4月10日

●方法：10項目のうち5項目※にしぼり、信徒にアンケート用紙を配布（メールと紙で）

※1. 旅の同伴者、 2. 聴くこと、 3. 声に出すこと、 6. 教会と社会における対話

10. シノドス性の中で自己形成すること

・4月24日までに各部の部長・地区委員でとりまとめて提出してもらい、評議会役員でレポートを作成。

### 【皆さんからの回答まとめ】

各質問の後の →以降は 柳本神父様が考えてくださった補助質問です。

#### No.1 旅の同伴者

皆さんの教会で、「わたしたちの教会」というとき、誰がその仲間でしょうか。逆に、どういう人、またはグループが、教会内外で、取り残されているのでしょうか。

→「わたしたちの教会」の「わたしたち」は誰ですか。あるべき姿はどのようなものですか。

#### No.2 聴くこと

教会の内部で、また教会外の人々と、わたしたちの教会は、それぞれ誰に対し「耳を傾ける」必要があるでしょうか。

何が、耳を傾ける助けと妨げとなるでしょうか。

→教会を必要としている人はどんな人だと思えますか。わたしはどのようにしてその人たちの声を聞くことができますか。

#### No.3 声に出すこと

わたしたちの生活の中で、また地域社会や団体の中で、福音の価値を公に表明する場面がありますか。そのために、何が助けと妨げになるでしょうか。また社会に対して、誰が教会を代表して発言しますか。

→社会に対してイエスのメッセージや価値観を伝えるにはどうすればいいですか。わたしには何ができますか。

#### No.6 教会と社会における対話

皆さんの教会では、そのビジョンや方針はどのように話し合わせ、決められていますか。近隣の教区、地域の修道会、信徒団体などと、どのような対話と協力をしているのでしょうか。信者以外の一般の人々と、どういった対話、協力の経験がありますか。彼らから、どのようなことを学んでいますか。

→わたしは教会外の人々とどのようなかわりを持っていますか。

#### No.10 「シノドス性」（ともに歩むこと）の中で自己形成すること

皆さんの教会の中で責任ある役割を担っている人々が、互いに耳を傾け合い対話しながら、「ともに旅をする」教会がさらに成長し、共同で識別と決断ができるようになるため、お互いにどのような養成ができるのでしょうか。何が妨げになるのでしょうか。

→教会のメンバーが「ともに歩む」ためにどのようなことが必要だと思えますか。

## No.1 旅の同伴者→「わたしたちの教会」の「わたしたち」は誰ですか。あるべき姿はどのようなものですか。

### ●【「わたしたち」は誰?】

#### ◎すべての人

- ・皆、すべての人。(2)／私の隣にいる総ての人。／未信者・教会を離れた人・亡くなった人も含む全ての人
- ・信者であり、教会に救いを求めている未信者さんたち、全ての人。
- ・社会の真っ只中に生活する私たちはこの世の旅路を周りの人々とともに歩んでいるから、教会に属さない隣人、会社の同僚、上司、友人、知人も含むかもしれない。
- ・信者だけではなくすべての人が集まる家。すべての人に開かれている。

#### ◎キリスト者

- ・キリストを中心としてキリストを信じている人々の集まり。／イエスをキリストと信じる者。
- ・神の導きを信じて、キリストに倣って生きる努力をする者。
- ・三位一体の神を信じ、信仰を共にする兄弟姉妹。家族の長がイエス・キリストであり、わたしたちに同伴してくれる。
- ・教会に来ている人（自分を含む）や求めている人（2）
- ・信徒全員。高齢者、病人、障がいを持つ人。／いろんな事情で教会から離れている人が取り残された人たち。
- ・奈良教会の人。日本、世界全体のカトリック教会。その中で取り残されている人とは、自分で孤立していると感じる人。障がいを持っていてそれを言い表せない人。例えば聴覚障害を持っている人は一見わかりにくく、教会側が手話通訳可能というようなことを発信していれば助かるのではないか。
- ・全世界のカトリック信者。取り残されるというより、一人が「いい」という人もいる。もしそうでない人には積極的に話しかけていけたらと思う。
- ・私が属している奈良教会の、掃除当番の仲間、図書係、広報部の仲間、それが「わたしたち」。
- ・教皇様をはじめとする教会の構成員全員。私もその一部を形作っている。  
聖徒の交わりを考えると、亡くなって今は煉獄、天国にいらっしゃる靈魂も「わたしたち」に含む。
- ・小さい範囲ならば所属教会、そして地域教区、国、世界へと広がるのではないか。カトリック、プロテスタント、ギリシャ正教等にかかわらずと考えている。／洗礼を受けたすべての人。

#### ◎その他 教会は特技・社会的キャリア・元気で指示上手な成果、利益を上げる人で成す。

### ●【あるべき姿はどのようなものですか。】

- ・キリストの言葉を行う者（福音に従う者）／神様のもとにつながっている姿。
- ・祈る／互いに祈りあうこと。(特にコロナ禍にあって、一人一人の顔を思いうかべて祈ることで繋がりを感じた)
- ・謙虚さをもつ／思いやりをもって接する／相手のことを第一に考える／お互いの話を聞き合い、互いを助け分かち合う。
- ・誰でも訪ねられ、心落ち着く場所であること。
- ・苦しんでいる人が神を求めているなら、このような人々に心の安らぎが与えられる福音宣教の環境が必要。
- ・教会に来られた方が、探していることを話せる場を作りたい。長いこと離れた人も戻れる教会に。
- ・良き共同体であるべき／自分はその教会の一員だと皆が思えるそういう状態だと思う。
- ・洗礼を受けた共同体は全員仲間。教会で話ができる人、相談できる人がいる。心穏やかで、笑顔が絶えない明るい教会。
- ・祈りで結ばれる家庭的な教会。小さな教会(メンバー一人一人を皆知っている教会) 常に共同体の感覚でいられる教会。
- ・お互いに兄弟姉妹と思い、相手をキリストのように愛することが出来る教会。

### ●【その他】

- ・「わたしたちの教会」という言葉自体に、何か引っ掛かる。教会の主役が[わたしたち信者]という感じで、それは違うだろうと思う。その「わたしたちの」という時点で、外の人々と一線を画している感じ、共に歩む感のない感じがする。
- ・生きとし生けるもの全て。人間だけではなく神様が創られたすべての命。光と闇、天と地と海、草と木、星と太陽、魚と鳥と獣、この世の全てに満ちている神様の愛こそが教会ではないか? 「人」の集まりを前提にした教会では忘れがち。

## No.2 聴くこと →教会を必要としている人はどんな人だと思いますか。

わたしはどのようにしてその人たちの声を聞くことができますか。

### ●【どんな人？】

- ・わたしたちが社会の真っ只中で生活し、日々接している人々すべてが教会を必要としている。わたしたち信徒は、例外なく彼らの一人一人を少しでもイエス様に近づけるといふ使命を持っている。神父様や修道士とは違い、わたしたち信徒は、専門職を持ち、社会の隅々に入り込み、キリストを知らない人々と苦楽を共にしている。わたしたちは彼らのために祈り、熱意を持って仕事に専念し、仕事を聖化し、かれらの助けとなり、友情を培うよう努力すべき。そうすることで、かれらの悩み、苦しみ、悲しみ、喜びの声を聞く関係を築くことができ、友情と親しい語り合いの使徒職が可能になると考える。
- ・全ての人（自分を含む）(2)
- ・罪人
- ・自分の弱さや社会の不義に苦しみ、義に飢え乾いている人、また自分や他者からの助けではどうしようもなく解決できない悩みを持ち、神の助けを必要としている人。願ひ事や悩み事があり、助けや導きを求めている人。
- ・神についての知識を求める人。
- ・自分の生き方を探す人、生き方に悩んでいる人、よりよい生き方を求めている人、生きづらさ抱えている人。
- ・コロナ禍の中で誰とも会話できず、一人家でもっている人、高齢のため外出不可能な人、介護を受けている人。
- ・心寂しい人、孤独な人。
- ・苦しんでいる人、社会のいろいろな問題を解決したいと思っている人、問題を解決するために努力している人。
- ・物質的に貧しく、経済的、社会的困難にある人
- ・社会的にも弱い立場にある人。心身に障がいのある方。
- ・救いを必要としている人・癒しを求める人。
- ・宗教にかかわらず、全ての人に耳を傾けなくてはと思う。まだ教会を知らない人たちも。

### ●【どのようにして】

- ・内容や思いの深さに関わらず聞き、拒否せず受け入れる。(2)・せめて接する人に自分の心を開くこと。
- ・耳を傾ける助け→多様性。自由さ。開かれた心。相手に関心を持つ。耳を傾ける妨げ→自分の物差しや価値観に縛られる。
- ・自分が話したい、やりたい、したいことをせず、神の望まれている事を毎日みことばから聞き、相手の話を聞く。その内容を詮索・追及・他言せず、立ち上げられるように共感を祈る。
- ・私が平和な心を持っていることが大切。
- ・教会に来られない人には連絡を切らさず、誘う等。教会外の人には私達がよい見本となり来たいと思ってもらえるように。
- ・教会に行きたくても来られない人。お一人お一人のことを思い、心を合わせながら過ごす時間を持つ。その後は行動が起こってくると思う。(訪ねたい。訪ねに行く等) 傾聴(じっくり聴く)には十分な時間が必要。一人を大切に、声を聴き続ける。
- ・教会外で様々な人々と話をしていると、何かを必要としていると感じることがある。
- ・こちら側が気付いて歩み寄る。何らかの形で神様や教会のことを発信していく中で、互いに気付き合えることもあるのでは。
- ・悩みがあって救いを求めている人、信仰を深めたい人たちをキャッチするために、日頃の声掛け、その人の心を開いて安心してお話しできるように信頼感をつくる。何かを求めている人には、その人の心に寄り添い愛を持って接すること。
- ・人との交流が希薄になっている今、教会を必要とされているかは、向こうから言ってこられない限りあまりわからない。
- ・自分と関わっている人達からの声、マスメディアなど様々な情報源により助けを必要とする人や苦しむ人を知ることが可能。
- ・共に分かち合う場があれば聞くことができる。／様々な場に参加する。
- ・老人ホームなどの慰問。気軽に誰でも参加できる場が教会にあればよい。
- ・聖職者の減少している現在、信徒と協力して教会を必要とする人々の声を聞き、暖かく接して問題解決に取り組む。
- ・自らの罪の赦しを請う声は、聞こえることもあり、聞こえないこともある。
- ・司教や司祭の声を聞く。
- ・教会が神の家・わたしの居場所として存在するなら、共に集い、聴き、誇る欲求が出てくる。
- ・すべての人が「あなたはそのまま、生まれながらに愛されている大切なかけがえのない存在」と知ることが必要。一人一人の中に、神様に遣わされた幼子イエス、十字架の上に苦しむキリストがおられる感じる事で、その声を聴く事が可能。

### No.3 声に出すこと→社会に対してイエスのメッセージや価値観を伝えるにはどうすればいいですか。

わたしには何ができますか。

#### ●キリストに倣うキリスト者として生きる

- ・キリスト信者として向上し、世間から信用される人間になることだと思う。
- ・難しい。私の内にキリストがいてくださり、キリストに倣って生きる努力をすること。祈ること。
- ・イエス様がなされた（行い、そして教えられた）ように、まずは、自らの与えられた環境（会社や家庭）で一所懸命にはたらき、神の現存に生きることで、常に喜びを持って生活することだと思う。その上で、その人の必要、性格、日々の状況に合わせて、イエス様のメッセージに触れる機会は無数に現れる。その機を逃さず、自然に口をついてでてくる言葉、勧めたい読書・すべてがイエス様からのメッセージ、価値観であると思われる。
- ・聖職者のように福音を多くの人に直接話す機会がなくても、何よりも自身が福音に生きていることで、様々な機会を通してその行為、言葉、思いでその精神が自然に周りの人々に伝わる。
- ・福音メッセージを伝えるためには、「私自身が福音によって救われ、喜んでいること」が前提になると思う。
- ・信仰の喜びを持って。／自分自身の思いについての内省。
- ・他人を変えたり、責めたりするのではなく、自分が十分に生きることが大切だと考える。
- ・十字架などを身に着ける。待ち時間、移動中ロザリオ等同席者の平和を祈る。  
信仰は自分だけのものでなく、共に祈るところに神が生きていて働かれると知ると力になる。赦しの祈り、とりなしの祈り、困っている苦しむ人と一緒に祈りたい。秘跡にあずかり、司祭を助けたい。
- ・社会で起きていることに関してお互いに分かち合う。その中でイエスのメッセージを自分なりに受け取る。
- ・日曜日には教会へ行き、ミサにあずかる。まず自分の行動告白をする。声に出すことで周りの人の理解を得る。
- ・必要な時にはイエスのメッセージや価値観を実践する。思いやり。自己犠牲。世界平和のため声を上げること。etc.
- ・私たちを見て「イエス様とはどういうお方ですか」と興味を持って、問うていただけるような生き方をすれば伝えられる。

#### ●日常の交わりの中で

- ・祈りの心で「こころのともしび」を配布する。(2)
- ・心に残った書物を分かち合っメッセージや価値観を伝える事。
- ・公に表明することは難しい。親しい人には、会話の中にそっとメッセージを含ませている。
- ・直接神の話をするのではなく、行動を通してイエスの教えを伝える。
- ・言葉や行動を通してイエスのメッセージや価値観を伝えることは大切と思うが、なかなか難しい。  
教会の掲示板は良い方法の一つと思う。
- ・カトリック幼稚園の保護者の親睦会や、学び、祈りなどの交わりを通して福音的なものは広がっていく。  
クリスマスミサ、教会でのコンサートなどを通して呼びかける。
- ・地域社会の中での発言は難しい。SNSはじめ、色々な方法があると思う。個人的にできることは少ないが、日々誠実に暮らし、できる限り他者にご迷惑をかけず、(体力的 etc.できるかぎりと思っている) できることをご奉仕することか考える。
- ・人間は完全ではないから、正確にはできないと思う。神様から与えられているその人なりのできることを、毎日の生活の中で小さな事でも実行すること。／・一人一人の出来る範囲で、自分以外の人とまず接する。人を尊重する。わたしにはあまり何もできないと思い、その小ささをつみ重ね続ける。(何でも、どの様なことも)
- ・他宗教布教の訪問者にも、話を聞きつつ、いつか思い出してもらえよう教会の話をする。／他宗教でも信仰を持っている人とは互いに伝えやすいし、理解はしやすい。だからといって「私の教会」へと相手の信仰を変えることはむずかしい。
- ・押し付けたり力んだりせず、相手を受け入れる。
- ・出会う人、一人一人に、その方に神様の愛が届きますようにと、その方のために祈る心をもって、何かを「する」のではなく、共に「在る」ことを通して。

#### ●その他

- ・自分自身が強い思いを持つこと、マスコミへの発信やイベント開催など。
- ・イエスが現代の報道を見たら絶句されるだろうか、むしろ同感されることもあるのでは？

## No.6 教会と社会における対話 →わたしは教会外の人々とどのようなかかわりを持っていますか。

われわれ信徒にとっても仕事やボランティアなどの組織や事業所で、そして自らが所属する様々な活動場所やご近所同士のつながり、自治会等のコミュニティー、趣味やサークル、公民館の文化活動などにおいて、「教会外」の方々とのなくてはならない関わりが広がっている。奈良市民として社会人として、恩恵を受けている地域に対して、協力し合い、時には真剣に向き合いながら、地域社会の一員として義務をはたしている社会の姿がある。

そうした人たちとの日常の交流や協働の中で会話が生まれ、対話が深まる。こうして喜び、悲しみ、苦しみを共有し、悩みの相談にいたることもある。困っている人や苦しんでいる人の話を聞きつつ、心に寄り添い、癒しを分け合う。また解決に向けて、福音の精神をもっているキリスト者として自分のためだけではなく、関わる全ての人のために神に祈ることを心がけているという声も多く寄せられた。信徒たちは社会の一員としてそれぞれの方法で関わりをもっているというのが現状である。

しかしながら新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより信徒たちの教会へ行く回数が減り、社会活動も元通りには戻っていないもどかしさがある。また今の日本社会は少子化・高齢化などの課題を抱える状況もあり、若者を中心とする人口減少もあいまって、社会の対話が徐々に減少したり、制限を受けたりしている。

こうした中でも一歩踏み込んで、寄付をしたり、「心のともしび」を配布したりという信徒として、何らかの貢献を実践している人もいるし、教会での葬儀や追悼の式の参列者の方から「良い式でした」などの評価をいただいたことを心の励みとしている信徒の社会への関わりも地道につづいている。

一方で、『教会の人』、『教会外の人』という意識をあえて持たないようにしている。」という考えの人も少なくない。友人や隣近所の方々との助け合いなど、あたり前のことをする中では『お恵み』などの『教会で使われる表現』はあまり用いず、自然な交わりを心がけている、という。他宗教の友達に対しても普通に話をするので、機会をとらえて信仰の話をする。他の宗教や教会の催し物に参加をしたり、見学したりする、という人もいる。相手の信じているものを尊重することで、自分の信仰を押し付けない、という前提が大切であり、カトリック教会の中に『排他性』や『閉鎖性』が生じないことこそが重要である、『教会外の人々』とも同じ気持ちで接する「信仰の方向や強さの違いも受け入れる大きさやおおらかさ」をもち、「信仰が弱いなどと、人を傷つける」ことがないような教会になることが大切であるという主張もいただいた。

最後にこの【No.6 教会と社会における対話 →わたしは教会外の人々とどのようなかかわりを持っていますか。】のまとめとして、当カトリック奈良教会の一信徒の現状と今の思いを紹介しながら、まとめに替える。

『私は現在、奈良市内の就労支援福祉作業所で生活支援員として働いている。社長をはじめ、スタッフ、ご利用者（障がい者）すべてはカトリック信者ではない。彼らとともに長く働くうちに自然に自分がキリスト者であることを話す機会は訪れた。仕事のシフトを組むとき、ミサの日時、特にクリスマスなどの祝日の機会にそのことを話すことがあったからである。また、仕事で車に同乗する機会に、雑談が哲学、生き方などに発展し、その人の興味がありそうな良書を勧めることもあった。みんながみんな洗礼に至らずとも、聖霊のお望みの通り一人一人のやり方で一歩でも半歩でもイエス様に近づくことができたら成功だと思っている。もちろん、その中からカトリック要理を勉強したいという人やミサに参加したいという人が出てきたらいいなとも思っている。』

## No.10 「シノドス性」（ともに歩むこと）の中で自己形成すること

→教会のメンバーが「ともに歩む」ためにどのようなことが必要だと思いますか。

### ●話し合うこと

- ・使徒職や自己形成について話し合う機会があったらいいのではないかと思う。
- ・お互いを知ること。・互いに理解を深めること。寛容に。
- ・相手のいう事に耳を傾ける。

### ●内省・愛・許し

- ・これまで自分の力だけで生きてきたつもりが多くの人に助けられてきた人生であると悟り、許し難い人にも心を開き、

間違っていたことにも許しを願わなければならない。

- ・隣人を愛し、許し合うことだと思う。
- ・私たち一人一人は神様の大切な、神に愛されている存在であることを体験し、実感し、悟り、互いに尊重し合い、祈り、神の望まれる方向にともに向かって歩む。一致の祈りと許し合いと和解のうちに。

### ●祈り

- ・日常の中に祈りと共に歩むこと。朝昼夕の祈り、ロザリオの祈り（祈願・ウクライナのための平和の祈り etc）
- ・祈りの心を忘れない。
- ・聖書を読み、祈ること
- ・祈り合うことだと思う。その妨げとなるものは自分の価値観に固執することや自己保身からくる閉ざされた心、恐れ、勇気のなさだと思う。柔軟性が大切。ともに歩むために私たちの能力だけを頼るのではなく、共に祈り合って進むことだと思う。教会は「キリストの神秘体」なのだから。その恵みと力はミサからいただくもの。ミサの尊さ、聖であることを大切に、共に祈る教会であってほしいと願う。
- ・愛されるよりは愛することを望ませてくださいと祈ること。たとえ私がおのれを愛せなくても、神様がその人を愛しておられ、神様の愛と慈しみをその人が感じ取ることができるように、その人のために祈る。すべては神様につながるひとつのぶどうの木、“からだはひとつ”を思い起こす。

### ●教会活動の中で

- ・これまで通り教会の色々な活動に参加し、ともに歩んで行きたい。聖書講座に参加し、キリスト教を理解したい。
- ・グループ活動（聖書講座、祈り、要理教育 etc.）、奉仕活動（貧しい人への協力、平和運動 etc.）
- ・互いに仕えあい、愛し合い、信仰を分かち合いながら、互いの霊性を保ち高め、自身の救いを全うし、教会のメンバーの一人として宣教の役割を果たしていく。
- ・ともに歩みたいと思う気持ちを持つこと。その為の教育・養成・仲間作りとか。
- ・思いやり。教会の中で自分の居場所を自覚できるようにすること。
- ・できない、できそうにない、と思う中でも必ずできることが与えられていると思う。それは部分的なものかもしれないが一人一人ができることを出し合えば、その部分部分が組み合わされ一つになれると思う。そうやって皆が歩めるのではないか。
- ・共に祈る機会を持ったり（聖書講座に出たり）宗教的行事、観賞会、コンサート、映画等に出かける。

### ●あらためること

- ・教会内での足の引っ張り合いや誹謗中傷。これらが教会の成長の妨げの大きな原因になっているように感じる。
- ・中心がキリストであることを忘れ、自分中心にならないこと。
- ・役割のある方は聖霊に導かれ行うこと！成功をおさめても新しい人や子供が育たず身内だけになる。だから傷ついた人が聖霊によって立てるようになれば他者をより良く理解し互いに愛し合う家族になれると思う。
- ・否定せず意見を言い合うことができ、共に考え、励ましあえる、雰囲気づくり。
- ・信者歴・活動内容にこだわらない。
- ・異なる意見も尊重しあう姿勢が大切。一部の中心的な人が、自身の判断を押し通そうとすることは妨げとなる。若い人たちの奉仕を育むことへの配慮。謙遜と他者への尊敬の心を持つ。
- ・ただでさえ少数派のカトリック教会のメンバーがグループで固まったり、派閥を作ったりせず同じ信仰を持つ者同士心を開いていて話し、力を合わせる必要があると思う。
- ・権力、地位、圧力が教会の中にはある。みな神様の前では平等。強きも弱きもなく、人として受け入れ接することが必要。
- ・多種多様な人の集まりで、一つ共通している事は神様を信じている事。この事を中心に動けばともに歩む事が可能になるのではないか？自分の意見を押し付けない。他人を批判しない。

### ●その他

- ・「シノドス」といった、なじみのない言葉を使うのをやめることから始めるべき。